



(四)間をおき、ふしをつけて、泣く時は、空腹、又は、のんどの、かわいたので、あります、此時は、乳を與へるか、或は、さました湯を與へるがよくあります

(五)手足をもかき、全身に力を入れて、非常に、泣く事があります、此時は、がらだの發音上、必要があつて、泣くのでありますから、十分か十五分位は、泣せてよろしくござます。

フレーベル會俳句端書集

(一) 課題 當季雜吟 一人十句以下 (二) 締切 八月二十五日限り (三) 披露 明治三十八年十月發行本誌上 (四) 賞品 天地人三座には景品を呈す (五) 撰者 本會の撰評 (六) 投稿 本誌購讀者は何人にも投吟する事を得用紙は繪葉書に限り (眞筆刷物隨意) 住所氏名雅號を明記し 必らず左の名宛にて送らるべし、

埼玉縣入間郡芳野村フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第十三回俳句端書集

川船にとぶや蟹の右左り 仙臺 一 瓢
 追ひつめて見れば川あり蟹狩 同
 一と聲は隣りの門や初松魚 同
 菅笠の霧に隠る、夏野かな 武藏 白醉樓
 蟬啼くや松原十里風絶えて 同
 五月雨や昨日の傘を又借りつ 同
 蚊遣火に三郎を待つ次郎かな 東京 辰子
 覗きく針箱を出す枕綱 同
 ハスト流行る貧乏町や五月雨 同

納所が觸るゝや寺の田植時	拜殿の廣き板間やたかむしろ	抱き起す坊の寐顔や蠅の糞	薄雲のはらゝ雨や柿の花	ほとゝぎす明方さむき峯の坊	雨やみて月に若葉の雫かな	蟬啼くや松から晴るゝにわか雨	鶯に遠き五重の塔や夏木立	白扇感吟の句を乞はれけり	日盛やほこりのくさき馬車電軍	晝寝して目をさましけり投機論	月涼し向ふ二階で琴の音	群れて遊ぶ梅雨の暗間や幼稚園	半日の梅雨の暗間や下駄掃除	風涼し廂にせまる流れ星	涼しさや夕虹くゝる星一とつ	明方や露置く芥子の花一と重	明星や植ゑ残りたる一枚田	卵の花や曉さむき星の色	星飛んで話燃え立つ納涼哉	蚤にまけて庭ふむ星の一と夜哉	蟬啼くや藻屑の匂ふ砂の上	東雲や葉柳の露重う見る	松杉に出口のくらき氷室かな
大分	長野	長野	神奈川	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
春	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
月	霞	霞	洋	綾	迷	留	村	雪	笑	江	道	山	水	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

早霜のなる間に出て、松の月
伐株の桐の芽太し半夏生
枯かゝる梅の接木に毛虫哉
照りつゝく朝や青田の露曇り
汐さしてゆれる真菰や行々子
今日も又昨日の垣や蝸牛
田へ配る水の工夫や雲の峯
炎夫や薙きせたる水車
戦死者の墓標たてけり栗の花
雨にして物憂き庭や柿の花
拜し去る如意輪堂や郭公
姉と妹嬪に螢をかぞへつゝ
峠三里旅の勞れや心太

三光

人 蚊柱を乗り崩しけり裸馬
地 初螢あら千枝子さん春子さん
天 喘ぎく峠半ばや蟬時雨
追 加 鹽野奇零
凄秋や庭に頬張る握り飯
雨に風暗に曇りや五月空
入梅や人各々の腸も
胃を病みて輕き酔味嗜や五月雨
十日目に傘干して五月晴

梅雨晴や雲切々に星まばら
紫陽花や線香くさき寺の門
植える田や晴より雨の賑やし
虹消へる雨に涼しき田圃かな
五月雨や届く封書の糊はなれ
母衣懶や罪なき夢にうかさるゝ
納涼舟ハシカチふりし人戀し
田五作の顔だけ黒き浴衣かな
髭はやす歸省の兄の浴衣かな

短歌募集

▲課題 隨意

▲切 八月二十日限り

▲発表 本誌上

▲賞品 三光に粗景を呈す

▲撰評 みどり短歌會

▲投稿 用紙隨意、字体鮮明、左記の處宛に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村

みどり短歌會

平和 眞宮起雲

幸なれや姫か優手に活けられて神のみまへに匂ふ白百合
獨たどる夢路はるか海原や山も見分かつたゝ浪あらし
終日にしなれし草木夕べ露にひとは信のいづみに活きむ
うなぬ等が唄ふ罪なき譜に和して眞白き髻の翁立ち舞ふ
エンセルの忘れがたみか翼生は御相宛然神にふさはし
朝顔は露にひかり得人は子の笑まひのそれに平和を見る
あさもやに室の音こもり神苑の紅蓮白蓮にほひあふるゝ
青によし奈良のふるやに歌おもひ聞かば興ある子規かな
市に出て歌玉うらむ藝なし野のゆふへをば泣かば事足る
よるこびはあしたに開く白蓮と愛の光のそらに充つる時

讀書の葉

家庭 教育 繪ばなし

繪を見たりかいたりするのは、子供の非常に喜ぶ
ことであつて、殊に見る繪が自分等の平生親しく
知つて居るものであると、其喜は又格別である。
子供にこんな繪を興へることは、其美の情を養ふ